



天
184
3

奇談環雙紙

禮

13
184
3



於
184
3



寄修環草紙第二之巻

繋る玉の緒け事

依聖の冠者春及罪科とさるゆり粟津の松糸より
 さるなりとて武士共茶後を守護してをさいつ守白子小
 袖を大くちをうりて着く是本の教珠をみふさし入月元
 の約よまゝなるありさぬ整れくるを次女とて一珠よあてよ次
 くけはの抱思ひふやうりくおとやせたるがゆゑをうたぐ
 とふらるは来のふ定をうて世よもまれなる兵男うり
 けを科の符もまゝねどもぬ又あけらるる矢つねんとの
 つとちりさよとて皆袖とぬらし念佛とて我をぬりける

此の九月のさくらとよ遊上るるふんはほせの岸にたつたあ
 うさたゆくふと懐るる消入かうふおのちの身はうへとわ
 おもまれんは良の根下風小波の立をさるみとくまごせ
 記の海小流轉まらざとあさるるおのうけくつてははを
 うもんぐよ花丁着小横武う柳園の根もあひぬぞられ
 旧卿の言はせまばすくさるふくもまきちち縁のわれとそ
 一もそだて修り今せおさうといひくぐり知るあななき風
 の便の音信とともやくとうそ結たまうんとも久又縁
 の空ととも人のれおひぐこみ我い人よさくさみ一お
 と引おれ一ある一このころ今へたや小年上うが春て我の

のとくは一時めあふ哀うありためと思ひ残さぬまをふ
 一さあされへ何ぞ我や狩あ物のもぬとやうの鎌ふみの
 杖のふれ髪を修よんをまじく端となり耳泉殿のまを
 の思を修むまじくもあふまの露もそのまれの糸に糸一
 あればまじく一途途ありともあふれ花ごふおれはのたふ
 くて一もあふまじくなら又る身のまをひとたを何とも此
 別れりもたご目しるまご思ひまじくはるまをきてのこ
 とへまをまじくするまをまじくおれへたやくとまをまじく
 内押まじくして表るり愛小横野のなを思ふよまをまじく
 一とまをまじく一は萩の上風と淋身おまをまじくはるり一おま

の下^しあ^ると^いふ^く繁^く大^け青^もあ^れぐ^不本^葉か^りち^る氣^り
 色^もと^なら^ぬぬ^れと^ゆり^りと^あつ^ぬへ^の公^の外^に不^思
 後^まと^るあ^るは^名と^是東^まく^てあ^るん^んより^義濃^の幽^い
 一^をあ^りは^くと^の松^もも^存を^やや^もあ^ひ文^にの^ま行^原
 あり^とく^遠坂^ふと^もあ^り初^めの^人津^のう^らま^なり^あ
 り^あ其^の地^の者^もあ^ると^とと^との^松東^れち^まく^世
 ふ^まよ^びる^るあ^の子^と因^代の^まよ^りさ^りの^ゆら^やと^と
 一^のの^とも^心しく^くと^集あ^りり^れの^あち^とさ^すら^さえ^と
 東^なく^くや^りの^うと^まり^終て^まれ^の其^まは^のよ^よ
 坐^一西^又む^らく^くま^とあ^るを^高智^ふを^佛十^福ん^唱入^く

髪^のう^らみ^のり^たる^を本^へう^たさ^り居^直つ^ける^は後^よく
 これ^はま^のつ^ふそ^とあ^りる^を目^をと^くと^とあ^らむ^も
 消^たせ^やれ^志と^うと^つた^れも^声を^らて^すと^と
 か^取後^え文^のり^さて^はま^りん^とと^と一^時か^りく^大勢^の
 と^のり^とく^まり^ひと^まり^のた^とと^とあ^らむ^りつ^た
 最^期又^一言^や度^との^のれ^とま^けう^はあ^らむ^とれ
 と^めら^るひ^たや^とや^れの^の武^士情^まの^のの^のて
 何^らあ^らむ^まと^ゆり^てた^れを^刀を^振上^げ
 か^らお^りる^また^の穢^れを^入ぬ^とあ^らむ^くて^あら^む
 と^とた^くま^りれ^後と^あら^むと^あら^むを^あら^むと^あら^む

繩うてとほりまあるを武士何某よむいんて序
芳志のやうしとあうはうぬりれ柵素い於其案の
し横屏の者をとせし川りぬあさましと今うんか
の殿いものよして只今夫をれんむら人の厚恩あう
たる古まの若君しとぬりさるみ袖ありてまがぬ二十
しとありらるとやたぬの採弓もぬれてかきんや
美念のしるきう箱いりのと江口れ里しり代りて得る
今よくぬ彼すとぬらぬあうてし明白しと別其時の
各形の交よんそとがんざん小入きんし懐より
名とぬれくともぬりしとぬらぬのぬらぬ二十

まよ四以返一以せ一定せり扱もまぬたハ一筋ふ澄ての
くふしとぬぬるをぬ人よせしとて尋ぬたよしとて
己が飛とるしけん志の程もあさぬれれ何某とりぬま
てよろしく神ぬくしやぬらぬと声れ下りの引き
ぬるをやよ及げぬぬもあぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
校の後とるがりのりうて目代より江にれ里長者う方
へ人ととせく伴の合の本をきく小ふふ余の賣人の本
徒であし小年六つとつもの江口の里よと拾石女ども
と召果て拾びたむれ主人のこがぬとぬとぬとぬとぬとぬ
者へ引お物とるよう一定ぬらぬの模野の者をぬの

長者之条のうぬ責人之人共呼おされ俵の金ハ有らば
 さらばものと賣代りたる金有れば有るへく下さる
 同様の長者へくしておたはしめりものとて戻をせしむ
 まいねせぬとされども之条の商人盗すれし金有れば商
 人へ返をせし商人共と借とり納むたへく納むたし
 承渡の者身も應せん持君持女と召集め持び不
 のそりくばあやうく人々のめのと盗取しと金く家の持
 と後一うくする故るれば之されよよくそ共時の酒食の比
 之だけの去者が方へ送るたへくとやとこれけをば行後
 明るは政事おれと感服しとて返さるるお小平六がと

と尋ぬるふ於までをせとおめしこのお成せん事と
 おそれちくせんしと志お入へ来て根子とて心しおをせくお
 件のおまよそしたんまよが飛よたれともんや実入
 のあつてけんすとあをせしめり月まうくまき着よ役し後
 とにそりりあせりしとの人悪人ければ神明佛随も是
 とおくそまひならぬら夫の細よかりまきあがとてお
 うしげまれんとせし粟津の松原まき首とを結くれ
 るるとそ後まき同し

甲斐なるた後の事

去程おまきあはるるともふ於へくるとまきくも人

とまふ草紙へ遣へ思ひぬ外のことを考の余の草紙の
 さまふおかしき清やらとあれは今の備いをもしてあま
 らぬあまともいへんたやと思ひはげはく備どうあま
 よもいふれハ備ふた月ぞとよは教はるうまさひのそ
 こん一人あまを歌うんぎることとを公著一これ今も
 あれよた使と求めく途ひまひくせんといおのいもい
 るた余のゆふたれハを中く深き花料もなかりつれ
 りあひあれた者ととものおいぬらんずらんとのさづらう
 ひとよあめぐくを送りりりるがとや小卒六がふはくりあつたれ
 ハ其あひもるうりなれハ成法より外のるくもさるく

是るものあふたりを一秋も正冬もきて今年とともや
 はてしなくもさるとふなりみたり其もやうくはけぬ実小
 や光陰矢のしくた月もりのとあんとされハたうこれ人
 の表よの空天風流とあられも別がよみからうんのあとの
 ありける世のさぬとるるおほけ今鎌倉も多しく月く小
 ちかやわく紫葉の大度の地まて人の心も頼み一ときく
 とよ武の家よむまれんりの物とあふおのあまさる
 たりお月うん六十倍あの人入くるあるれハあハ張子あ
 ぐりあふともあふんむんまれより鎌倉よくどつてん
 やしくあふたまよびくも我流なれハお流るへういあま茶とあ原

うさりの乃月影の音とつふふあんなればそれとて
 舟の底へ茶のうも文をまきまのせんと厚紙をまきま
 ぬき渡りたり板日は懐涼うけうまんせうれたふいふ
 のささし海の涼さふらう人厚く報付して又も於てよ
 出か今も又名跡とぞふ徳ぬれく聖治の藤原成りか
 是なる鏡ふまきあの中へは中たれし教とんづりくあれ
 くささしき不破の系後より人と満海の小さくどま
 鳴海く蝶多ふ拍とらふなる八橋とまさく色く風もさ
 めく淡松のまきぬあきと於はて天龍とつふ渡ふま
 みりり多の人の従来よまうくく味もるたぬまのりて

せぬたまはなしあつたこととらぬるも西行う若もあ
 出くおく心細くぬまふらうよ向ふの埜に人多く考はる
 けととま合の人のあれたあまをまらやらんといふあつた
 舟長まきまあれたまの娘の女れあれる港まき
 空しくさうらるる行函めあなるの中へんまあのみれ
 ざらうまあうたの辺ふまれと建うれあまあまの者あう
 山の目代へ強くしまやあつたらとてうまをまきま
 茶をもてあむらうし時集合てはら其女房多の齡廿
 とまへくさうまうまうまのげはらよ様と考はる若ふのぬま
 かなう髪は只飯をよし侍の髪の色の新よふかうた風

長門一氏



情容顔しほ涙なみだ小こ夏なつあかきけ世の人ともどつれをあめいの衣
 とくく夕ゆふ霞かすみるれへ着れ小こ笠かさとぬぐくふふりちる條あじろの杖
 小こをうつらうもひ舟ふね小こ乗のりたりうぐうと港みなとの小こ笠かさ小こ踏ふみ歩あゆ
 うひく舟ふねひ居ゐ居ゐけあぐら功せき瓶びんに飲のみささ福ふくささわわかかうう
 ともあのお舟ふねさうと船ふねひも家いえりかふやまうとことばはう
 とうであつはる故ゆゑつれを今宵こんやの泊とまりと定さだげらん池田いけだの客きやくハ
 何なにれそそぬつと眠ね寐みを免まぬかそあうとと作あづぬいたと
 係かへしあひらん見み付つれれへは後あと遠とほく眺ながむくれるささめ
 とまひとあうりあかきととと人ひとく糸いとと尋たづねるふり
 なる遠い御ち小こあうりるやとやつとと後あとづくるうづれを

西にしとい知しねども日の入いりととるこそと念ねん仏ぶつととる
 けく南みなみ無む西方さいほう極ごく糸いと世よ久くの教きやう主しゆこそか来らいあや預よ
 あやまきさだ何なにつてまうれく妹いも脊せれうくひ必かならずむと
 つ蓮はすととるくくするあよあきくどさほくむさん
 やは無む度たの風かぜよととそれくそやひ世よふさき人
 せくるりしお夜よ不ふ何なにもそいさる人ひと不ふ情じやう深ふかうしと
 づれの伏ふしよと後あとしやらん今いま少すこしとやくとあう
 ままもまどハそれられたくもああ姿すがたああ身みねあひあひ残のこ
 ままともあうがぬて旧里ふるさとへも届とどまのせるせるるははあて
 のことらうくおとさうぬたよんぬさの縁いづの空そら

びりよたれ侍よめのもるれよ病よ深うて居る
 の露と消し心のうちさつを哀う有りり人々
 しく袖とぬじりるが扱しもあなほさふあはぬが
 盡又其雨よほてりり紅糸青黛も朽ぬれを
 聖原に土只り女の抱懐とのそりりていと徳はく
 舟ハ者よをはこよりり糸念の舟の宗法除跡乃
 と三河のぬよあつすを後とるうけく念佛をを
 中りる其老ハ身よ動しくあつりればとよるんぞ
 と留めり孫容貌とつて衣服とつて一定多まにるれ
 ども争のよるよひ二十斗よくあ孫ぐるといひ小少

力とけくま月形て建られしはとるよひとぬあ
 長が抱懐よまがらんるされとるはくくと後りせ
 小懐の抱のうち小巻地の綿の守袋をよよと
 包めり其文ハ抱く日は探さむのよと人巻たて
 急の雨のそにたれまより扱しとむざんと争しそのの
 せんるもいもつそとつそはあなれん地をせられり
 れあやとがふよりの所のおよとまものそとそ文をん
 だま由中られぬ茶一あるまどととせせりりたぬた
 が後やあつりらんあぐと敷敷てあとも茶の文もたが
 こんまが笑よりほくし文ありりり扱しと孫が病よと

うめのうらりと疲男の行進とてこの旅をせよと
 へかよふぬやと云葉をあらんとせしむるもめめ
 るふこそや環へび世よるたものごとく真直し
 内めの言のしゑと受しくとあよくとあつるふ
 驚きまゝ歩ゆららふ小條のあそととむらるふ
 ありとまゝくつて入つたれつせし後小終る
 るりてりりまゆた愛れ受たつたかうまゝ案とと
 るる小最早の方をくつてあつたれどもはふの宿を宿
 四里八丁に端まゝくつてのま中るればおし小宿つて
 ありまゝ入付小宿つてよるまゝと約し報り飛揚

さくつゆが宿まゝくつてぬぞうしよの女宿へか
 う往來の旅人まゝへあつたつてぬ男のたゆまが出
 来まゝありりりやまゆたの志契まゝと失るまゝくつて
 ふち旅のあやまゝはあつておれし旅者中つてまゝと
 せよこの時をたゞまゝくつてまゝくつてまゝあつた
 宿のまゝくつてまゝくつてとほつたつてせられたる
 小宿と取てまゝくつてまゝくつてまゝくつてまゝくつて
 書て旅の後まゝくつてまゝくつてまゝくつてまゝくつて
 んまゝの夜の月もまゝくつてまゝくつてまゝくつてまゝくつて
 なるまゝくつてまゝくつてまゝくつてまゝくつてまゝくつて

玉直集卷三 十一

ら祿に亡まるといふも一とさうく一とことと立よりまれ
 こそむ名跡おしやむひげんやうくさ付後うさよれ
 申ふ裁のぞ命ありといふ人ども難面あひの白根と
 とを祿やうの宗律のふ辺の若れ細及か母そくと過
 仍急せやんせぬ一智さむありりりと祿のうこ
 ひ初めのひりん足柄ふ及を一とそお根強あう
 ちあうぞれ歳とぞそが原あさく日敷やうくまわれ
 ば孫倉へ一と入よりれ去後ふ及をい交添さし人乃
 とそと裁奪て初の文届せを頼よりそそまも中
 りうび人情添さしものましく身より引後ふの及らん後へ

なご仕はる一何とも思召ことあうハゆかやへ一とと
 さあぐつさうり孝進をあうその寺小殿なる寮の
 ありらるとあり小言へ入はのくま及とあさひらあめ
 初めとまま事平とそ思召せしれれば頼の方丈一とあ
 て法の及ともまが祿なることよりお昌おまそあ
 養ましく大度令の地を備困れ冬人どもとのあ集ると
 るれハ文の道武の及へつ又及らば抱養といふるを
 能原ともともあう心とあじが及ゆと祿られあ月
 なる人とするる片とあまの附も未頼かしくそえ
 けらしと或付連秋れ序後て二三集といふるまれま

らうらの初秋秋暮よましく奥ふるるとんありきふ
ゆし入夜のよまんとととこよりるあうてつたりとあり
亭まを海高を借く白根まのよま秋
あそねくこませ舞まうせりればとよあつてく年次
横り骨まも散まをたうんま入るはも夕柳又低ま
りれば松若松女ども西より東ふよりまへと街を
ゆくありこぬ花の紅るあれ柳の緑るあつま
ふの賑まもあれば水け閑るあつづれあま
ともまざりり入て二階の櫓下ふよりま興ま入る
ま中へ傾城まも昔ま一人の傍まあれま

がろくのぬ今もも急暮の後と借しとやま一人無ま
めそつそりり亭れまうこま一人参りてびつたやうなる
と静寝り入るあくれこぬとまこまもまありあま
系たのりま一人の歳とつる松若るり又まうけのま
のまうとんとましく向の亭へ入る和歌の景あれ
志津ま入るまの佛といまこま松まをま一人はく外
の法方くの折まあれて入る内ま松若あつて借るま
つりまをま参まま向くままあまはまもれあま
まはまよ竹まあまんとままれまま一人とすまあれま
只環がまのまもるまうくまうまこれ世のあぢたま

